

研究拠点形成事業
平成 28 年度 実施報告書
B. アジア・アフリカ学術基盤形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	早稲田大学イスラーム地域研究機構
(マレーシア) 拠点機関：	Asia-Europe Institute, University of Malaya
(アラブ首長国連邦) 拠点機関：	Faculty of Arts and Humanities, New York University Abu Dhabi

2. 研究交流課題名

(和文)： 多文化環境下における価値の交渉—イスラームとの共生に向けた発展的研究
(交流分野：地域研究、人文学、社会科学)

(英文)： Negotiating Values in Multicultural Circumstances: Toward the Symbiosis
from Islamic Area Studies
(交流分野: Area Studies, Humanities, Social Science)

研究交流課題に係るホームページ：<https://www.waseda.jp/inst/ias/research/islamic/jsps/>

3. 採用期間

平成 26 年 4 月 1 日 ～ 平成 29 年 3 月 31 日
(3 年度目)

4. 実施体制**日本側実施組織**

拠点機関：早稲田大学イスラーム地域研究機構
実施組織代表者 (所属部局・職・氏名)：イスラーム地域研究機構・機構長・桜井啓子
コーディネーター (所属部局・職・氏名)：人間科学学術院・教授・店田廣文
事務組織：早稲田大学イスラーム地域研究機構

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名：マレーシア

拠点機関：(英文) The Asia-Europe Institute, University of Malaya
(和文) マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) The Asia-Europe Institute, University
of Malaya, Executive-Director, Azirah HASHIM

協力機関：(英文) The Halal Science Center, Chulalongkorn University
(和文) チュラロンコン大学ハラール科学センター

(2) 国名：アラブ首長国連邦

拠点機関：(英文) Faculty of Arts and Humanities, New York University Abu Dhabi

(和文) ニューヨーク大学アブダビ校人文学部

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) Faculty of Arts and Humanities, New York University Abu Dhabi, Associate Professor, Martin KLIMKE

協力機関：(英文) Qatar University

(和文) カタール大学

5. 研究交流目標

5-1. 全期間を通じた研究交流目標

1. 「イスラームと多元文化主義」を基盤とした多文化研究の環境整備：3年間のアジア・アフリカ学術形成基盤事業を通し、マレーシアの多元文化主義からイスラームとの共生を考察した結果、イデオロギーとしての多文化主義の限界、多文化環境下に培われた共存の知恵という、相反する側面が明らかとなった。これを基盤に、歴史的にイスラームを含む多文化環境を継続する東南アジア、20世紀末からオイルマネーによりイスラームの環境の中に外国人が加わり多文化環境に突入した湾岸、今後より多くのムスリムを迎え多文化環境が加速する東アジアという3つの多文化環境を射程として、研究環境の整備を行う。

2. イスラームに見るグローバリゼーション：ハラール（イスラームの行動規範）、国際移動、多国間対話の研究グループを組織し、イスラームにおけるグローバリゼーションを明らかにする。ハラールは、産業を巻き込み、教義や化学分析による規格化が進む中、多様な基準が成立しつつある。国際移動は、国境を越えた人の移動が加速する中で、マイノリティとしての文化や独自の価値がマジョリティの中に消失しつつある。多国間対話は、国際的連携が試行されてはいるが、主権国家によるパワーポリティクスから踏み出せない。上記3地域の異なる多文化環境下にみられるグローバリゼーションと標準化の推移を検討する。

3. 価値交渉モデル：早稲田大学イスラーム地域研究機構は、文部科学大臣認定による共同利用共同研究拠点（イスラーム地域研究拠点）として、日本におけるイスラーム地域研究の中心として、「イスラームとの共生」を模索してきた。その結果、ムスリムと共生するための仮説として、1. 価値判断における曖昧性の担保、2. 価値観の多元化、3. 寛容性に基づいたお互いの容認を提起したい。本事業による3年間の共同研究を通してこれらの仮説を実証的に検証し、3つの仮説に基づいて、異文化間の価値観の交渉をモデル化した価値交渉モデルを提案し、イスラームとの共生に向けた発展的研究を遂行することが最終目標である。

5-2. 平成28年度研究交流目標

<研究協力体制の構築>

平成26年度から平成27年度にかけては、従来からのマラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院と早稲田大学イスラーム地域研究機構のパートナーシップに加えて、ニューヨーク大

学アブダビ校の協力を得て、3校の関係者による新たな研究班を編成するに至った。平成28年度は、前年度までの国際セミナーや研究者交流活動を通して、ニューヨーク大学アブダビ校の研究者の研究テーマが一層明らかになったことを踏まえ、若干の研究班の見直しを行う。とりわけ、近年研究の新たな展開が期待されるイスラーム科学について、上述各3拠点に研究者が存在することを踏まえ、同分野の研究班を新たに設置する。また、年度後半に実施する国際セミナーにおいては、3拠点の関係研究者が一堂に会して、各研究班の成果を報告し議論を深めるとともに、3年間におよぶ本事業の全体の総括をおこなう。さらに、年度末には、本事業を通して構築されたこれまでのパートナーシップの将来的な継続と発展を模索するために、各研究班の日本側代表者が関係拠点に赴き、打合せ会議を行なう。

<学術的観点>

平成25年度までの3年間のアジア・アフリカ学術基盤形成事業「イスラームと多元文化主義」を通して、イスラームとの共生モデルを構築するためには、3つの仮説に基づいて価値観の相互干渉の過程をモデル化することの必要性が明らかとなった。グローバル化が日々進行していく現代的状況において、互いの文化を尊重しながら、世界総人口の4分の1を抱えるイスラームとの共生を模索することは、引き続き重要な課題であることは言を俟たない。平成28年度には次に示す4つの研究班を作るが、以下にその学術的課題をまとめる。

ハラール班「飲食をめぐる価値観の多元化と共有」

ハラール研究は、文化／社会人類学・社会学・歴史学・国際政治学・法学・食品化学・応用生物科学・情報学を含む文理融合型研究で、住民生活、国際貿易、規格化など現代のハラールについて多面的に考察すること特色とする。ハラールの規格化は曖昧性を除去し価値基準の一元化をもたらす一方で、それぞれの国や機関独自の規格化は価値基準の多様化を促進するという二面性を明らかにする点が重要である。平成28年度は、各国のハラール、コシエル、ヴェジタリアンの飲食をめぐる価値観の多元化とその対応を整理し、宗教・民族・国の制度を跨いだ人びとの実践と複層的なアイデンティティについて、多元的な価値観の交渉と容認・包摂・排除の過程を検討する。

国際移動班「トランスナショナルな移動と社会的相互作用」

国際移動に関して、質的、量的な社会調査を通して住民の意見をくみながら、グローバルな世界の動向と繋げて考察する。マイノリティがどのようにして文化環境を維持し、またマジョリティが如何にして彼らと共存していくのかという側面を検討する。平成28年度は、前年度までの作業と議論を引き継ぎつつ、トランスナショナルな移動によって生成される当事者間の相互行為に焦点を当てる。多文化環境下における社会的相互作用の在り様、価値の交渉状況に関する調査・分析を実施するとともに、研究者間の交流、国際セミナー等を通じ、知見の共有をはかる。

多国間対話班「多文化国家における対話と共生」

各国における多文化状況は、国家形成過程や移民などの歴史を通して形成されてきたものである。平成28年度は、引き続き多様な民族と多様な宗派の人々が混在する、つまり多

文化状況にある中東湾岸地域、東南アジアを対象にして研究を行う。多文化で構成される国家における共生と対話について歴史的な視角を交えながら研究を進める。

イスラーム科学班 「イスラーム科学における多文化潮流」

本研究プロジェクトの目的は、イスラーム文化における科学的実践の多様性を明らかにすることであり、主としてイスラーム科学の形成期とその後の時代を対象とする。とりわけ中世期の数学ならびに医学のテキストの分析を進め、その結果をグループワークならびに研究セミナー等で相互に議論・検討する。

<若手研究者育成>

本課題は、早稲田大学イスラーム地域研究機構、マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院、ニューヨーク大学アブダビ校、各大学のイスラーム研究者を中核として、本研究と関連をもつ他大学ならびに他国の研究者も包含しながら、研究者ネットワークの構築を推進するものである。これに際し、大学院生やポストドクターをはじめとする若手研究者にも門戸を開き、ネットワーク型プロジェクトの形成と成果発信にかかる積極的な参加を呼び掛ける。

多文化環境がもたらすダイナミズムに関わる諸問題は、イスラーム地域研究あるいは関連領域を志す若手研究者にとって共通する重要な課題である。同時にそれらの諸問題への取り組みは、学際的アプローチが求められる分野でもある。翻って、本研究が形成しようとするネットワークは、日本（東アジア）、マレーシア（東南アジア）、アラブ首長国連邦（中東湾岸）を拠点と位置付け、アメリカ・カナダ（北米）など広く他地域までをカバーして、研究者、専門領域、研究手法等を取り結ぶ。かかるネットワーク形成により共有される多様な対象、アプローチ、方法論に関する研究の発展に触れる機会は、若手研究者に視野の拡大をもたらす。加えて、自らの能力を発揮できるプロジェクトの形成や新研究領域を開拓する機会ともなり、さらなる成果発表が期待できる。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

本共同研究事業はイスラーム教徒中心の社会である中東、イスラーム教徒と非イスラーム教徒の混在する東南アジア、近年イスラーム諸国との人的交流が進んでいる日本にそれぞれ拠点を置く3機関の共同研究を中心にして進められてきた。共同研究によって、様々な角度からのイスラームとイスラームとの共生についての研究成果と知見が蓄積されつつある。本共同研究の拠点組織である早稲田大学イスラーム地域研究機構では、本件研究事業の中で得られた研究成果と知見を活用しながら様々な研究会やセミナーを実施し、共同研究で得られた様々な成果を研究者や社会へ還元することに努めた。平成28年度も、引き続きこうした活動を継続させる。ISの台頭に顕著なように、近年における中東における政治的激変を背景に、日本においてイスラームに対する関心が飛躍的に高まるとともに、イスラームに対する偏見や差別が増幅していることも否めない。そうした時代状況にあって、しっかりとした学問的背景に基づくイスラームについての知見を社会に還元することは、イスラームとの共生をはかってゆく上での重要な貢献となる。

6. 平成28年度研究交流成果

6-1 研究協力体制の構築状況

早稲田大学イスラーム地域研究機構、ニューヨーク大学アブダビ校ならびにマラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院の3拠点機関の協力のもとで実施してきた本プロジェクトも3年目を迎えた。プロジェクト最終年度に当たり、本年度は、過去2年間に蓄積した共同研究の成果をよりひろく公開することに重点を置いた。そうしたことから、本年度は、後述する全体の国際セミナーとは別に、各研究交流班が単位となって、公開形式で研究成果を発表する場を設けることにとめた。

共同研究 R-1（「飲食をめぐる価値観の多元化と共有」）は、平成28年11月にマラヤ大学においてマレーシア側代表者 Md Nasrudin Md AKHIR 氏、同研究者 Siti Rohaini KASSIM、Nurulhuda NOORDIN 氏およびゲストスピーカー2名を招き International Workshop on CROSS-BORDER DISCOURSES ON HALAL を開催し、個別報告とともにラウンドテーブル・ディスカッションを行った。一般の方も含めて9名の参加があり、セミナー実施にあたり1名を4日間派遣した。共同研究 R-2（トランスナショナルな移動と社会的相互作用）は、平成28年9月にマラヤ大学経済経営学部において研究ワークショップを開催し、同大上級講師の Ng Sor THO 氏による研究発表“*Youth Lifestyle in Multicultural Society: Case of Muslim and non-Muslim youth in Malaysia*”を実施した。一般の方も含めて13名の参加があり、セミナー実施にあたり1名を5日間派遣した。共同研究 R-3（多文化国家における対話と共生）は、平成28年10月にニューヨーク大学アブダビ校の Martin KLIMKE 氏を早稲田大学に招聘し（5日間）、“*The Global Network University: A View from New York University Abu Dhabi*”と題する特別セミナーを開催した。一般の方も含めて20名の参加があった。共同研究 R-4（イスラーム科学における多文化潮流）は、平成28年12月に同じく早稲田大学において特別セミナーを開催し、Robert MORRISON 氏が“*The Afterlife of Homocentric Astronomy in Islamic Science*”と題する報告を行った。一般の方も含めて5名の参加があり、セミナー実施にあたり1名を11日間招聘した。

各共同研究班を単位としたセミナーに加えて、平成28年12月2-3日にかけて、早稲田大学を会場として国際セミナー“*History, Challenges and Prospects*”を開催し、イスラームとの共生に関する様々なトピックについて報告と討議を行なった。本報告書7-2（セミナー）においても述べるように、本セミナーは、研究交流班の枠を超えた研究者間の討論を推進することで新たな知見の創出を目指した。

上述の諸セミナーの開催に当っては、マラヤ大学とニューヨーク大学アブダビ校側から様々な支援を受けた。セミナーのプログラム策定過程においては、当該年度早期より、関連研究者の推薦と交渉を行うとともに、セミナー会場の確保をはじめとする、会議開催にかかる費用や旅費の一部を負担した。

平成29年3月には早稲田大学イスラーム地域研究機構の秋山徹次席研究員がニューヨーク大学アブダビ校（5日間）ならびにマラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院（6日間）を訪問し、本事業終了後における交流の継続について確認するとともに、新たな研究プロジェクトの立ちあげをも視野に入れた、交流の具体的なありかたについて協議を行った。

6-2 学術面の成果

本プロジェクトは、イスラームとの共生に向けた異文化間の価値交渉モデルを提案することを目標とし、そのために4つの共同研究班を設置した。共同研究の3年目に当る平成28年度は、プロジェクト最終年度ということもあり、従来通り各班の共同研究を遂行する一方で、過去2年間における共同研究成果を総括・発展させる方向で展開することができた。

共同研究 R-1（「飲食をめぐる価値観の多元化と共有」）では、マレーシア国内においてハラール認証を付加価値として利用しつつ、地域性を活かした新たな商品・サービス開発や、第6次産業化支援における売り出しを含めた政府の体制の一端が明らかになった。11月のワークショップでは、3年間の共同研究の総括を行い、マレーシアの日系企業のムスリム・非ムスリムの実務者をゲストにむかえた。多文化に対応した商品・サービスの開発や提供に際しては、消費者を含めた双方向的なコミュニケーションが最も有効であることが、現場の事例を通じて明らかになった。

共同研究 R-2（トランスナショナルな移動と社会的相互作用）では、前年度までに蓄積した各地の多文化環境に関する理論や制度、移住者の創出したトランスナショナルな社会空間やネットワークに関する知見を踏まえて、よりローカルな文脈へ接近することを目指した。そのために、研究交流活動の機会を通じ、前年度までに収集した質問紙調査データの分析を進め、特にマレーシアにおけるムスリム留学生の生活実態ならびに国内外に広がるネットワークの実態およびその効果を明らかにした。その結果、これまで十分に明らかにされてこなかったムスリム留学生における留学を契機とした移住意志とネットワークとの関係を、量的データをもとに析出することができた。

共同研究 R-3（多文化国家における対話と共生）では、アラブ・ムスリムを中心としつつもインド人をはじめとする多数の海外労働者が住むアブダビ、ムスリムを中心としつつも中国系やインド系も多いマレーシアなどを対象として、多文化国家における共生のありかたを、国家体制との関係から分析した。各国の多文化状況には著しい相違があるため、安易な一般化は難しいものの、国家が異なる文化の存在を公式に認めることが、多文化共生を実現するために最低限必要であることが、明らかになった。

共同研究 R-4（イスラーム科学における多文化潮流）では、イスラーム文化における科学的実践の多様性を明らかにすることができた。早稲田大学の Camillo Nathan SIDOLI 氏は、サイモン・フレイザー大学の BERGGREN John Lennar 氏と共同で、アッバース朝初期において推進された数学作品のアラビア語翻訳写本の比較検討を行い、異なる時代における改訂過程を分析した。その結果、それらが単なる翻訳ではなく、各時代の知見を盛り込んだ新しいヴァージョンに変容していることを具体的に示すことに成功した。広島大学の三村太郎氏はイスラーム圏の天文学者たちが発展させた天文学の手引書を分析し、それがインド天文学の手引書の影響を受けて成立し、プトレマイオスの「ハンディ・テーブル」の知識と融合し、発展していく過程を示した。ボードウィン大学の Robert MORRISON 氏は、イベリア半島からのユダヤ教徒追放によって、活躍の場を東地中海圏に移したユダヤ教徒たちが築いた経済ネットワークについて検討し、いかにしてイスラーム科学の知がヨーロ

ッパの学者にもたらされたかについて明らかにした。総じて、本共同研究を通して、イスラームをめぐる多文化状況を歴史の深層に立ち返って明らかにすることができた。

これら4班の研究活動を通して、本プロジェクトの目標として掲げた、イスラームとの共生に向けた異文化間の価値交渉モデルについて以下のような結論に達した。すなわち、多文化状況には多様なパターンがあり、多文化間の関係はもとより、文化それ自体も常に変化しているため、固定的制度は機能しない。むしろ、国家による多文化状況の公認と、文化間の継続的な対話のメカニズムの担保が、文化間の摩擦を最小限に抑制するために最も有効である。

6-3 若手研究者育成

本プロジェクトは、早稲田大学イスラーム地域研究機構、マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院、ニューヨーク大学アブダビ校、各大学のイスラーム研究者を中核として、本研究と関連をもつ他大学ならびに他国の研究者も包含しながら、研究者の国際的ネットワークの構築を推進するものであった。こうした特徴を有する本プロジェクトを遂行することは、本報告書6-2において述べた学術面のみならず、若手研究者の育成という観点においても、以下のような積極的な成果があった。

昨今、人文・社会系学問を取り巻く状況は益々厳しくなりつつある。その要因は複合的なものであるが、大きな点として当該学問の専門細分化・タコツボ化が指摘されている。この問題は、本プロジェクトが基盤とする地域研究にも陰を落としている。専門とする地域・ディシプリンに没入するあまり、視野が狭くなる傾向はとくに昨今の若手研究者に顕著な現象である。こうした状況に際し、共同研究の単位が特定の地域やディシプリンに収斂されない本プロジェクトは、若手研究者に多様な対象、アプローチ、方法論に触れる機会を与え、ひいては彼らの視野を拡大することに大きく貢献した。例えば、12月に実施した国際セミナーにおいて、異なる研究班のメンバーが加わったジョイント・セッションを積極的に取り入れた。

グローバル化が進展してゆくなかで、共通語としての英語の重要性が高まりつつあることは言を俟たない。こうした傾向は、地域研究をはじめとする人文・社会系学問においても顕著であり、とりわけ日本の若手研究者にとって、英語での発信力の強化は枢要かつ喫緊の課題である。そうした観点において、本プロジェクトは日本人若手研究者の英語発信力を鍛えるという点でも大きく貢献したと言える。パートナー校の担当者との間で頻繁に取り交わされた事務連絡を通して、英文ビジネスメールの作法を習得するとともに、国際セミナーにおいて、ネイティブスピーカーを前にした英語でのプレゼンテーションと質疑応答を経験することは、日本の若手研究者の発信型英語力の底上げに貢献した。例えば、12月に実施した国際セミナーでは、各セッションの発表後に設けられた質疑応答時間において、日本人若手研究者に対して挙手と発言を義務づける取り組みを実施した。

6-4 その他（社会貢献や独自の目的等）

近年、日本においても、イスラームの存在感は高まっている。国内のムスリム人口は約

11万人とわずかではあるものの、留学生を中心に今後も増加する見込みである。また、オリンピックの東京開催を控え、観光産業、ハラール産業など、イスラーム文化への理解とムスリムとの共生は重要な課題となっている。早稲田大学は、5000名を超える留学生を受入れているが、イスラーム圏出身者も増加しており、礼拝室や学食でのハラール食提供など、キャンパスの多文化化に努めている。平成28年10月に早稲田大学で開催された、ニューヨーク大学アブダビ校のMartin KLIMKE氏による特別セミナー“The Global Network University: A View from New York University Abu Dhabi”は、国際的で多文化環境下にあるアラブ首長国連邦のニューヨーク大学アブダビ校での取り組みを中心に、湾岸地域における大学の国際性と多文化共生の可能性と課題について考えるものであった。参加者した研究者、教員、ムスリムを含む学生は、アブダビにおける共生の現状を参照しつつ、早稲田大学そして日本におけるムスリムとの共生について、検討する機会を得ることができた。

6-5 今後の課題・問題点

本プロジェクトは、日本、マレーシア、アラブ首長国各拠点の若手研究者の交流を活性化させ、各国におけるアカデミック・キャリアの形成に関する情報・意見交換の機会を提供した。国際的な学術界で日本人研究者の研究が認知されるために何をすべきかを明らかにすることは、重要である。3年に渡る継続的な交流を通じて海外の研究者たちの研究スタイルやアプローチを身近で学べたことの意義は大きい。日本の多くの研究者にとって、英語での発表・議論・論文執筆は、容易なことではないが、本プロジェクトに参加した日本人若手研究者は、経験を積むなかで大きく成長しただけでなく、欧米の研究を紹介するだけの研究は、海外では通用しないということを改めて認識する機会を得た。さらに言えば、欧米の理論や視点に基づいた地域の描写ではなく、日本人の視点、日本人ならではの分析を示さなければ、国際的に発信する意味がないという点を明確に意識できるようになったということである。英語という国際語で発信するからこそ、逆に欧米の眼鏡を通さない日本独自の地域研究の手法とスタンスが強く求められることになる。日本が推進する地域研究は、現地と対等な関係を重視し、日本の研究者と現地の研究者の双方にメリットがあるということをアピールする点に大きな可能性がある。本プロジェクトで培ったイスラーム圏の大学・研究者との国際的ネットワークを活かしつつ、現地の研究者と共同で、英語ないしは現地語で研究成果を公表するという研究スタイルを定着させ、日本の人文社会科学の新しい展開を試みることを今後の課題としたい。

6-6 本研究交流事業により発表された論文等

- (1) 平成28年度に学術雑誌等に発表した論文・著書 12本
うち、相手国参加研究者との共著 0本
- (2) 平成28年度の国際会議における発表 17件
うち、相手国参加研究者との共同発表 0件
- (3) 平成28年度の国内学会・シンポジウム等における発表 1件

うち、相手国参加研究者との共同発表 0件

(※ 「本事業名が明記されているもの」を計上・記入してください。)

(※ 詳細は別紙「論文リスト」に記入してください。)

7. 平成28年度研究交流実績状況

7-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成26年度	研究終了年度	平成28年度
研究課題名		(和文) 飲食をめぐる価値観の多元化と共有 (英文) Collaboration and Cooperation across the Borders			
日本側代表者 氏名・所属・職		(和文) 砂井紫里 早稲田大学イスラーム地域研究機構・招聘研究員 (英文) Yukari SAI・Organization for Islamic Area Studies, Waseda University・Adjunct Researcher			
相手国側代表者 氏名・所属・職		(英文) Md Nasrudin Md AKHIR・The Asia-Europe Institute, University of Malaya・Executive Director, Michael GILSENAN・New York University・Professor			
28年度の研究交流活動		日本側代表者・砂井紫里は、9月にマレーシア側研究者 Nurulhuda NOORDIN氏とともに、マレーシアの消費者向けエキスポにおいて、ハラール産業の動向について調査を行った(7日間)。また後述の11月ワークショップについて、マレーシア側代表者 Md. Nasrudin Md. AKHIR氏らと協議した。11月にマラヤ大学においてマレーシア側代表者 Md. Nasrudin Md. AKHIR氏、同研究者 Siti Rohaimi KASSIM氏、Nurulhuda NOORDIN氏およびゲストスピーカー2名を招き(本事業外経費)International Workshop on CROSS-BORDER DISCOURSES ON HALALを開催し、個別報告とともにラウンドテーブル・ディスカッションを行った。一般の方も含めて9名の参加があり、セミナー実施にあたり1名を4日間派遣した。12月の国際セミナーでは、セッション5: Transnational Islamにおいて、マレーシア側研究者 Md. Nasrudin Md. AKHIR氏およびアラブ首長国側研究者による推薦の Schuyler Marquez氏から報告があり、現代ハラール産業をめぐるアクターについて議論を行った。			
28年度の研究交流活動から得られた成果		9月の共同調査では、マレーシア国内においてハラール認証を付加価値として利用しつつ、地域性を活かした新たな商品・サービス開発や、第6次産業化支援における売り出しを含めた政府の体制の一端が明らかになった。また、消費者への啓蒙の一方で、消費者がレジジャーとして見本市に参加する様相がうかがわれた。11月のワークショップでは、3年間の共同研究の総括を行った。マレーシアの日系企業のムスリム・非ムスリムの実務者をゲストにむかえた(本事業外経費)。現場での対応事例から、			

	<p>商品・サービスを模索する上で、段階的な対応と情報開示の重要性、さらに、消費者も含めた当事者同士の双方向的なコミュニケーションが欠かせないことを共有した。これらは、多様な背景をもつ人びとが、それぞれの価値観を解釈し、自らの価値観と擦り合わせ共有していく過程において欠かせない。今後の共同研究について意見交換し、成果のとりまとめと共同調査の企画案など、協力関係をさらに深めることとなった。</p>
--	---

整理番号	R-2	研究開始年度	平成26年度	研究終了年度	平成28年度
研究課題名	<p>(和文) トランスナショナルな移動と社会的相互作用 (英文) Transnational Migration and Social Interaction</p>				
日本側代表者 氏名・所属・職	<p>(和文) 岡井宏文 早稲田大学人間科学学術院・助手 (英文) Hirofumi OKAI・Faculty of Human Sciences, Waseda University・Research Associate</p>				
相手国側代表者 氏名・所属・職	<p>(英文) Ng Sor THO・Faculty of Economics and Administration, University of Malaya・Assistant Professor, Rima SABBAN・Department of Humanities and Social Sciences (HSS), Zayed University・Associate Professor</p>				
28度の研究交流活動	<p>9月8日にマレーシアのマラヤ大学経済経営学部において、Ng Sor THO 上級講師 (University of Malaya) による研究発表“<i>Youth Lifestyle in Multicultural Society: Case of Muslim and non-Muslim youth in Malaysia</i>”を実施した。同時に、3年間の研究交流活動において収集した質問紙調査データを使用した論文執筆・雑誌投稿に関する打ち合わせを実施した。いずれも参加者は、論文を共同執筆している店田廣文 (早稲田大学)、岡井宏文 (早稲田大学)、Ng Sor THO、TEY Nai Peng (University of Malaya)、SIA Bik Kai (Universiti Tunku Abdul Rahman) であった。一般の方も含めて13名の参加があり、セミナー実施にあたり1名を5日間派遣した。12月4日に開催された国際セミナーでは、セッション5の <i>Transnational Islam</i> において、店田廣文 (早稲田大学) が、戦前・戦中期の日本におけるムスリム移民の生活実態に関する報告を行った。</p>				

28年度の研 究交流活動から得 られた成果	平成28年度は、前年度までに蓄積した各地の多文化環境に関する理論や制度、移住者の創出したトランスナショナルな社会空間やネットワークに関する知見を踏まえて、よりローカルな文脈へ接近することを目指した。そのために、研究交流活動の機会を通じ、前年度までに収集した質問紙調査データの分析を進め、特にマレーシアにおけるムスリム留学生の生活実態ならびに国内外に広がるネットワークの実態およびその効果を明らかにした。その結果、これまで十分に明らかにされてこなかったムスリム留学生における留学を契機とした移住意志とネットワークとの関係を、量的データをもとに析出することができた。その成果は、共著論文として学術雑誌に投稿中である。12月の国際セミナーでは、店田廣文（早稲田大学）が、戦前・戦中期のムスリム移民を対象とする研究発表を行った。これにより、これまで現代的テーマを中心に展開してきたR-2の研究が過去の動向と接続され、トランスナショナルな国際移動と相互作用を、時代的広がりをもって理解・共有することが可能となった。
-----------------------------	--

整理番号	R-3	研究開始年度	平成26年度	研究終了年度	平成28年度
研究課題名	(和文) 多文化国家における対話と共生 (英文) Dialogue and Symbiosis in Multicultural States				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 福田安志 早稲田大学イスラーム地域研究機構・招聘研究員 (英文) Sadashi FUKUDA・Organization for Islamic Area Studies・Waseda University・Adjunct Researcher				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Martin KLIMKE・Faculty of Arts and Humanities, New York University Abu Dhabi・Associate Professor, Azirah HASHIM・The Asia-Europe Institute, University of Malaya・Executive-Director				
28年度の研 究交流活動	多文化状況にある中東湾岸地域、東南アジアを対象として、それぞれの国における対話と共生について歴史的な視点を交えつつ研究を実施した。10月14日にはアブダビ側の代表者である Martin KLIMKE 氏を早稲田大学イスラーム地域研究機構に招聘し（5日間）、多文化状況にあるアブダビにおける対話と共生の現状について討議と意見交換を行った。一般の方も含めて20名の参加があった。また、12月3-4日には国際セミナー“Islam and Multiculturalism: History, Challenges and Prospects”を早稲田大学イスラーム地域研究機構にて開催し、その中で Politics of State Building と題した一つのセッションを組織し研究報告を行うと同時に、研究者間の交流に努めた。				

28年度の研究 交流活動から得 られた成果	平成28年度は、多文化国家における対話と共生に関しての海外の2つの拠点 New York University Abu Dhabi と The Asia-Europe Institute, University of Malaya と、早稲田大学イスラーム地域研究機構との間の研究協力の3年目に当たる。アラブ・ムスリムを中心としつつも多数のインド人なども住むアブダビ、ムスリムを中心としつつも中国系やインド系も多いマレーシアなどを対象として、国家体制や多文化包摂の仕組みなど多様な角度から多文化国家の共生を分析・研究した。多文化国家における対話と共生についての質量ともに大きな知見を蓄積することができた。それらの研究成果と知見の蓄積は、将来の多文化国家・社会における対話と共生につなげることができるものであり、また、近年多文化国家状況が進みつつある日本での今後の対話と共生への手がかりとなるものである。
-----------------------------	---

整理番号	R-4	研究開始年度	平成28年度	研究終了年度	平成28年度
研究課題名	(和文) イスラーム科学における多文化潮流 (英文) Multicultural Currents in Islamic Science				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) シドリ・ネイサン・カミッロ 早稲田大学国際学術院・准教授 (英文) Camillo Nathan SIDOLI・School for International Liberal Studies, Waseda University・Associate Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Justin STERNS・Faculty of Arts and Humanities, New York University Abu Dhabi・Associate Professor, Muhammad Azizan SABIAN・School of Humanities, Universiti Sains Malaysia・Lecturer				
28年度の研究交 流活動	早稲田大学のシドリ・ネイサン・カミッロ氏は8月下旬および12月下旬にカナダのバンクバーにあるサイモン・フレイザー大学を訪問し、同大学教授の BERGGREN John Lennar 氏と、中世アラビア語テキスト中に現われる、数学をめぐる記述の読解について意見交換を行うとともに、同大学図書室において関係資料の収集を実施した。12月3-4日に早稲田大学で実施された国際セミナーにおいて“Multicultural Trend in Islamic Sciences”と題するセッションを組織し、シドリ氏のほか米国ボードウィン大学の Robert MORRISON 氏と広島大学の三村太郎氏が登壇した。さらに12月10日には、同じく早稲田大学において公開特別セミナーを開催し、Robert MORRISON 氏が“The Afterlife of Homocentric Astronomy in Islamic Science”と題する報告を行った。一般の方も含めて5名の参加があり、セミナー実施にあたり1名を11日間招聘した。				

28年度の研究 交流活動から得 られた成果	本研究班は本年度のみの実施ではあったものの、イスラーム文化における科学的実践の多様性を明らかにするという目的を十分に達成することができた。早稲田大学のシドリ・ネイサン・カミッロ氏は、サイモン・フレイザー大学の BERGGREN John Lennar 氏と共同で、アッバース朝初期において推進された数学作品のアラビア語翻訳写本の比較検討を行い、翻訳とみなされている作品群が、単なる翻訳にとどまらず、改訂されていく過程を明らかにした。広島大学の三村太郎氏はイスラーム圏の天文学者たちが発展させた天文学の手引書を分析し、それがインド天文学の手引書の影響を受けて成立し、プトレマイオスの「ハンディ・テーブル」の知識と融合し、発展していく過程を示した。ボードウィン大学の Robert MORRISON 氏は、イベリア半島からのユダヤ教徒追放によって、活躍の場を東地中海圏に移したユダヤ教徒たちが築いた経済ネットワークについて検討し、いかにしてイスラーム科学の知がヨーロッパの学者にもたらされたかについて明らかにした。12月3-4日に開催された国際セミナーにおいて以上の研究成果を報告するとともに、相互の意見交換と交流を深めた。
-----------------------------	--

7-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「イスラームと多元文化主義—歴史・課題・展望」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Islam and Multiculturalism: history, challenges and prospects”
開催期間	平成28年12月3日 ～ 平成28年12月4日 (2日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、東京、早稲田大学 (英文) Japan, Tokyo, Waseda University
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 店田廣文・早稲田大学人間科学学術院・教授 (英文) Hirofumi TANADA・Faculty of Human Sciences, Waseda University・Professor

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (日本)	
		A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	5 / 15	
	B.	2	
マレーシア 〈人／人日〉	A.	2 / 12	
	B.	1	
マレーシア (日本側参加者) 〈人／人日〉	A.	1 / 9	
	B.		
アラブ首長国 〈人／人日〉	A.	1 / 7	
	B.	1	
アメリカ (日本側参加者) 〈人／人日〉	A.	1 / 11	
	B.		
アメリカ (アラブ首長国側参加者) 〈人／人日〉	A.	1 / 5	
	B.		
合計 〈人／人日〉	A.	11 / 59	
	B.	4	

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナー開催の目的	<p>4つのサブテーマ、1. 飲食をめぐる価値観の多元化と共有（ハラール）、2. トランスナショナルな移動と社会的相互作用（国際移動）、3. 国家における多文化状況の形成過程の検証（多国間対話）、4. イスラーム科学における多文化潮流（イスラーム科学）の共同研究の成果を発表することを目的とする。同時に若手研究者によるポスターセッションを開催する。年度末には、セミナーの成果をまとめた英文プロシーディングスを出版し、国内外の関連研究者に向けて広く成果を公表する。</p>																																			
セミナーの成果	<p>早稲田大学を会場に開催された平成28年度の国際セミナーは“History, Challenges and Prospects”のタイトルで開催され、イスラームとの共生に関する様々なトピックについて報告と討議が行われた。</p> <p>3カ年のプロジェクトを締めくくる国際セミナーということもあり、各セッションを編成するに当たって、新しい試みを取り入れた。本プロジェクトは、3拠点に属する研究者で構成されるいくつかの研究班（ハラール班、国際移動班、多国間対話班、イスラーム科学班）に分かれて共同研究交流を実施する体制になっており、過去2回の国際セミナーでは、各研究班が中心となってセッションを組み、研究成果を発表するというスタイルを採用した。これに対し、本セミナーでは、異なる研究班のメンバーが加わったジョイント・セッションを積極的に取り入れ、本事業にかかわった研究者間の対話を促進した。</p> <p>平成29年3月には、本国際セミナーのプロシーディングス集を刊行し、本プロジェクトの参加研究者のみならず、内外の関連研究者・機関にひろく配布するとともに、同月に刊行された、早稲田大学イスラーム地域研究機構が発行する学術誌『イスラーム地域研究ジャーナル』9号に本国際セミナーのレポートを掲載した。</p>																																			
セミナーの運営組織	<p>早稲田大学イスラーム地域研究機構、ニューヨーク大学アブダビ校、マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院の本プロジェクト参加メンバーが協力して準備・運営を行った。</p>																																			
開催経費分担内容と金額	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 15%;"></td> <td style="width: 15%;">日本側</td> <td style="width: 35%;">内容</td> <td style="width: 35%; text-align: right;">国内旅費</td> <td style="width: 10%; text-align: right;">78,080円</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td style="text-align: right;">外国旅費</td> <td style="text-align: right;">2,022,560円</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td style="text-align: right;">国内・外国旅費に係る消費税</td> <td style="text-align: right;">114,626円</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td style="text-align: right;">英文論文集印刷製本費</td> <td style="text-align: right;">871,003円</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td style="text-align: right;">合計</td> <td style="text-align: right;">3,086,269円</td> </tr> <tr> <td></td> <td>(マレーシア)側</td> <td>内容</td> <td>会議費</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>(アラブ首長国)側</td> <td>内容</td> <td>外国旅費</td> <td></td> </tr> </table>		日本側	内容	国内旅費	78,080円				外国旅費	2,022,560円				国内・外国旅費に係る消費税	114,626円				英文論文集印刷製本費	871,003円				合計	3,086,269円		(マレーシア)側	内容	会議費			(アラブ首長国)側	内容	外国旅費	
	日本側	内容	国内旅費	78,080円																																
			外国旅費	2,022,560円																																
			国内・外国旅費に係る消費税	114,626円																																
			英文論文集印刷製本費	871,003円																																
			合計	3,086,269円																																
	(マレーシア)側	内容	会議費																																	
	(アラブ首長国)側	内容	外国旅費																																	

7-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

共同研究、セミナー以外でどのような交流（日本国内の交流を含む）を行ったか記入してください。

日数	派遣研究者		訪問先・内容		派遣先
	氏名・所属・職名	氏名・所属・職名	内容		
5 日間	秋山徹・早稲田大学イスラーム地域研究機構・次席研究員	Martin KLIMKE・New York University Abu Dhabi・准教授	研究打合せ		アラブ首長国連邦
3 日間	秋山徹・早稲田大学イスラーム地域研究機構・次席研究員	Azirah HASHIM・University of Malaya, The Asia-Europe Institute・Executive-Director	研究打合せ		マレーシア

7-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

該当なし

8. 平成28年度研究交流実績総人数・人日数

8-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元	四半期	日本		マレーシア		アラブ首長国連邦		カナダ(第三国)		アメリカ合衆国(第三国)		合計	
		人数	人日数	人数	人日数	人数	人日数	人数	人日数	人数	人日数	人数	人日数
日本	1		()		()		()		()		()	0/0	(0/0)
	2		()	2/12	()		()	1/9	()		()	3/21	(0/0)
	3		()	2/9	()		()	1/10	()		()	3/19	(0/0)
	4		()	1/3	()	1/5	()		()		()	2/8	(0/0)
	計		()	5/24	(0/0)	1/5	(0/0)	2/19	(0/0)	0/0	(0/0)	8/48	(0/0)
マレーシア	1		()		()		()		()		()	0/0	(0/0)
	2		()		()		()		()		()	0/0	(0/0)
	3	4/26	()		()		()		()		()	4/26	(0/0)
	4		()		()		()		()		()	0/0	(0/0)
	計	4/26	(0/0)		()		()	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	4/26	(0/0)
アラブ首長国連邦	1		()		()		()		()		()	0/0	(0/0)
	2	1/5	()		()		()		()		()	1/5	(0/0)
	3	2/15	()		()		()		()		()	2/15	(0/0)
	4		()		()		()		()		()	0/0	(0/0)
	計	3/20	(0/0)	0/0	(0/0)		()	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	3/20	(0/0)
カナダ(第三国)	1		()		()		()		()		()	0/0	(0/0)
	2		()		()		()		()		()	0/0	(0/0)
	3		()		()		()		()		()	0/0	(0/0)
	4		()		()		()		()		()	0/0	(0/0)
	計	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)
アメリカ合衆国(第三国)	1		()		()		()		()		()	0/0	(0/0)
	2		()		()		()		()		()	0/0	(0/0)
	3	3/25	()		()		()		()		()	3/25	(0/0)
	4		()		()		()		()		()	0/0	(0/0)
	計	3/25	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	3/25	(0/0)
合計	1	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)
	2	1/5	(0/0)	2/12	(0/0)	0/0	(0/0)	1/9	(0/0)	0/0	(0/0)	4/26	(0/0)
	3	9/66	(0/0)	2/9	(0/0)	0/0	(0/0)	1/10	(0/0)	0/0	(0/0)	12/85	(0/0)
	4	0/0	(0/0)	1/3	(0/0)	1/5	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	2/8	(0/0)
	計	10/71	(0/0)	5/24	(0/0)	1/5	(0/0)	2/19	(0/0)	0/0	(0/0)	18/119	(0/0)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

8-2 国内での交流実績

1	2	3	4	合計
()	()	1/3 ()	()	1/3 (0/0)

9. 平成28年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	100,890	
	外国旅費	4,505,621	
	謝金	0	
	備品・消耗品 購入費	0	
	その他の経費	871,003	
	不課税取引・ 非課税取引に 係る消費税	239,586	
	計	5,717,100	
業務委託手数料		600,000	
合 計		6,317,100	

10. 平成28年度相手国マッチングファンド使用額

相手国名	平成28年度使用額	
	現地通貨額[現地通貨単位]	日本円換算額
マレーシア	1,600 [リンギット]	40,000 円相当
アラブ首長国連邦	13,500 [UAE ディルハム]	400,000 円相当

※交流実施期間中に、相手国が本事業のために使用したマッチングファンドの金額について、現地通貨での金額、及び日本円換算額を記入してください。